

## 拠点大学の概要及び採択理由

機 関 名 慶 應 義 塾 大 学

### [国際化拠点の構想の概要]

- **本構想の基本的な考え方** 明治23(1890)年、慶應義塾は大学部設置にあたり、当時のハーバード大学エリオット総長に推薦を依頼し、最初の学科長に3名の米国人教授を任命した。それ以来、慶應義塾は一貫して世界水準における教育・研究・医療の実践を目標とし、国際化のための諸活動は常に大学全体の活動の核となってきた。創立150年を超えたいま、そうした伝統は「オープンでグローバルな学塾」の実現という基本方針として受け継がれているが、グローバル化の急激な進展のなかで変わりゆく人類社会を多方面で指導できる人材、とりわけ外国人留学生・卒業生を多数輩出していくことは慶應義塾の歴史的任務であると考えている。本申請を慶應義塾が国際社会において真に評価され尊敬される高等教育機関に飛躍する新たなチャンスと捉えるとともに、慶應義塾が日本の大学全体の国際化の牽引車の一つとなり得る機会と捉えている。その概略は以下の通りである。
- **英語による授業のみで学位を取得できるコースの設置** 英語のみで学位が取得可能なコースを「環境情報学部」(1学年15名程度×4学年)、「経済学研究科」(1学年10名程度×2学年)、「システムデザイン・マネジメント研究科(SDM)」(1学年15名程度×2学年)において計3コース新たに導入する。環境情報学部は学際性と国際性の融合を追求してきた湘南藤沢キャンパス、経済学研究科は伝統的な三田キャンパス、SDMは最先端分野の先導と社会人への開放を理念とする日吉キャンパス新校舎にそれぞれ位置し、特色ある教育を担う3つの学部・研究科が慶應義塾大学全体の国際化に大きな役割を果たそうとするものである。これら新設コースに共通する点は、その教育内容が国際的に高く評価されるように設計・組織されていることであり、英語で提供されているからというよりも、何よりも提供される講義・授業等の水準が国際的に見てトップクラスだからこそ世界各地から優秀な学生を引きつけることができるという考え方である。
- **留学生受け入れのための環境整備** 慶應義塾は特定地域に偏しない全方位的国際交流を基本方針としてきたが、本申請にあたってはとくに、1. これまで慶應義塾が相対的に強かった地域(欧米)からの留学生の受け入れを一段と増加させ、2. 反対に、国内他大学に比して一層の強化が必要と思われてきた地域(中国)からの留学生数をこ入れするとともに、3. 日本の他大学とも共通してその重要性に比してきわめて弱い地域(中東、南米)からの留学生を新規開拓しようとするものである。具体的には、1. 米国、2. アラブ首長国連邦、3. ブラジル、4. 英国、5. 中国の5カ国を受け入れ重点国として設定し、適切な広報、渡日前選考、宿舍・奨学金の支援等の受け入れに必要な諸業務を遂行する。
- **拠点大学の国際化** 本事業遂行のための支援を行う職員等の拡充は急務である。即戦力の語学堪能な職員等の配置のみならず、国際業務に対応できる職員を中・長期的に育成する制度を実務に即して開発する。海外の大学院に職員を毎年派遣し、プロフェッショナルとしての能力開発を行い、学内の職員のグローバル対応、多様化を目指す。あるいは、海外の交流パートナー大学等と職員の交換インターンシップ・プログラムなどを開発し、教育を支援する職員においても国際化を実施する。学則等の主要公文書も、一括して英訳する体制を着実に構築していく。教員についても、英語での授業数の増加を支えるために、より積極的な外国人教員の招聘・採用や、英語での授業実施のためのFD等を逐次導入する。
- **海外における留学生受け入れのための海外大学共同利用事務所の整備**
  - ①米国(ニューヨーク) 米国には日本の大学の拠点等が多数存在するが、東海岸地域はきわめて少ない。とくに近年、米国全土の名門大学の多くが学生の海外留学を必須の学習体験と見なすようになってきているほか、日本語に堪能な日本への留学(とくに正規留学)希望者が着実に増加しているが、現実には、日本への留学者数はきわめて少ない。そうした状況の下、米国全土からの日本への多様な留学(短期、長期、日本語学習等)を促進するための日本の大学共同の事務所を慶應義塾の国際拠点として位置づけられている「慶應義塾ニューヨーク学院」内に平成21(2009)年度に設置する。
  - ②ブラジル(サンパウロ) いわゆる新興諸国の中でも躍進著しいブラジルは、日本との特別の歴史的関係にもかかわらず、日本の大学としての交流がきわめて手薄である。こうした事態を日本の大学が共同して抜本的に改善すべく、サンパウロ大学内に平成24(2012)年に拠点を設置する。ニューヨーク学院の場合とは異なり、こちらは慶應義塾にとっても新規の国際拠点となるため、3年間の十分な実地調査等を重ねた後に開設する。慶應義塾は、同国への「移民の父」と言われている水野龍が福澤諭吉門下生であったことを別としても、サンパウロ大学との法学・医学・医療等の分野における30年以上の交流実績をもっており、現地に活躍する卒業生の多大な支援も期待できる。
- **達成目標** 質的に異なる優秀な留学生の着実な増加を実現するため、学部、大学院、短期留学の3種に分けて異なる戦略をとる。学部正規生については毎年着実に50人の増加で平成25年度末に550人(現状比約80%増)、大学院正規生(修士・博士)については急速な増加を予測して毎年着実に100人の増加で平成25年度末に800人(同約100%増)、各種短期留学生についても交換留学の拡大、日本語プログラムの多様化と拡充等による急速な増加を見込んで毎年着実に100人の増加で平成25年度末に700人(同約250%増)を目標とする。以上で平成25年度末で計2050人(同約100%増)となる。その後平成32年度末までの増加は諸種の要因により予測が容易ではないが、同様の予測により合計4000人(留学生比率10.4%)の達成を目標とする。外国人教員数は、各種の新規プログラム対応の有期教員の着実な増加を考え、平成25年度末に650人(全教員に占める比率9.6%)、平成32年度末に800人(同11.7%)の達成を目標とする。大学間交流協定に基づく交換留学は平成25年度末で受け入れ・派遣合計で1090人(現状比約150%増)、平成32年度末で1400人(同約250%増)を目標とする。日本人教員の海外教育活動も各種教育プログラムの企画、運営、実施にかかわり着実に増加させる。

**【慶應義塾大学】**

国際化拠点の概念図（海外における留学を促進するための取組、国内における留学生の受入のための取組について、構想の達成目標と取組計画をわかりやすく図示してください。）



留学生受け入れのための多様な方策（人数は平成32年度末の目標数）



**大学の国際化へむけた総合的な施策**

- 構想の組織的実施体制
- 事務体制の国際化
- 評価体制の構築
- 国際的な教員の支援
- 9月入学などの国際標準化
- 日本人学生の海外派遣

留学生の受け入れのための環境整備、受け入れ・支援の計画

渡日前入学選考  
 宿舍・奨学金  
 日本文化の学習機会提供  
 就職支援、インターンシップ

英語だけで学位取得可能な3つのプログラムを新設

- 環境情報学部
- 経済学研究科
- システムデザイン・マネジメント研究科

大 学 名	慶應義塾大学
-------	--------

〔採択理由〕

慶應義塾大学の国際化に関し、国際化を大学の戦略に明確に位置付け、英語による授業の実施や全学的な国際交流など、積極的に取り組んできた経験と実績は高く評価でき、今後の留学生の受入の更なる充実が大いに期待できる。また、国際化拠点の整備のための構想は、大学としての基本方針に沿って、組織的に国際化を推進する体制を充実し、留学生の受入や海外大学と連携した教育プログラムを計画するなど、本事業の趣旨に十分適合しており、その実現性も高く、我が国を代表する国際化拠点としての成果と今後の展開が十分に期待できる。

＜特に優れた点、期待できる点、留意すべき点＞

- ・近年、国際的に活躍できる人材の養成を特に重視し、国際化に向けた取組を大学全体の課題として積極的に推進しており、質的に充実した取組を期待できる。
- ・留学生の受入や海外拠点の設置の計画が、日本と各国との関係や、これまでの大学の実績を踏まえた具体的な計画となっており、奨学金や宿舍も充実している点は高く評価できる。
- ・学部における留学生の受入、日本人学生の海外派遣の実績はまだ限られており、大学全体としての取組の更なる充実が望まれる。